



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

村上先生と「堪忍」の教え

法音寺の二祖である村上斎先生は昭和22年2月3日、午後1時46分にご遷化されました。92歳の文字通り天寿を全うされました。村上家は長寿の家系で、娘さんも90歳近くまで、息子さんは90歳過ぎまで生きられました。ご遷化される少し前、1月29日の朝、村上先生は「もう無上道に帰るのだから、枕を北枕にしてほしい。多分、五日後の午後2時頃に帰ります」と言われました。それから、各方面に村上先生がご病気であるということとが通達されました。そして30日の正午頃、「私は無上道に帰るのであるが、私の徳はすべてここに置いていくから、皆さん堪忍強く、慈悲深く、真心広く修行してください。お互いの力次第で大きな徳の人となれます」と言われて、右手を握っては広げてを繰り返されました。



握りこぶしは堪忍を表しています。堪忍の大事さを最後まで伝えられたのです。

31日の夜、御開山上人を手招きして、「今眠っている間に私は極楽へ行ってきました。実にきれいなところで、たくさんのおさんまの仏さまのおられるところでした。仏さま方は私を取りまいて、ご苦労さま、ご苦労さまと労わってください、本当にうれしかったです。」と語られました。

2月1日、ここでご遺訓を村上先生に代わって御開山上人がお見舞いの方々に伝えられました。

「妙法蓮華経は慈悲・至誠・堪忍、因と果の五つです。三徳を実行して善因善果、悪因悪果ということを知って功徳を重ねていけば、必ず仏に成れます。妙法蓮華経の妙は、よみがえる、ということ。災いを転じて福となす。貧者を富者とする。病者を健康者とするということです。また大きく言えば地獄の者でも仏にするということです。仏になるためには百千万億の仏をご供養しな



ければいけません。これは、これから仏になる世の中の人達のことです。自分の周りの夫、妻、父母兄弟、隣人などに対して仏を敬うが如くしなさい。また朝起きて掃除することも、みな仏のご供養です。炊事をすることも、又商売をすることも、みな仏が相手です。敬いの心を持って接してください。人々の心に安心を与え、便利を与え、喜ばすように心掛けてするのは、みな仏のご供養です。こう考える時、仏のご供養は随分多いのです。毎日の働きは本当に意義があり、毎日がうれしい日となるのです」

この後、村上先生は御開山上人の手を両手で握って「それではどうぞお願いします。私の体はなくとも、魂はここにいて、今までよりも働きます。何もかもお渡しするのでお願いします」と言われたのです。ご遷化された2月3日は大雪でした。予言された通り、午後2時頃に大往生を遂げられました。



村上先生は元々愛知医専（現名古屋大学医学部）に勤めるお医者さんでした。村上先生はかなりの資産家でしたが、人に騙されてすべて失ってしまわれました。その上、奥さんと二人の子どもさんにも出て行かれて、もう死にたいと思っておられました。そこに杉山辰子先生が尋ねて来られたのです。杉山先生は妙法と医薬によつて世の人々を救おうと思われ、その協力者を探しておられたのです。そこで出会われたのが村上先生でした。杉山先生は村上先生に「因果の理法」と「仏教の真理」を説かれた後、次のように言われました。

「世の中にはあなたのように精神的にも物質的にも悩んでいる人が随分多いのです。この苦しみを逃れる途は妙法の信仰より他にはありません。あなたが今の苦しみを逃れるには、仏の教えを信仰し、そして世の中の悩んでいる人々を救ってあげることです。百人位の人が救われる時、あなたの不幸の因果は消滅するでありましょう」



杉山先生すぎやませんせいの話はなしを聞きかれた村上先生むらかみせんせいは、迷まよいから覚さめたような心持こころもちになられ、後の半生はんせいを信仰しんこうに生きよう、そして悩める人ひとの心こころの病やまいを治なおす医者いしやになろうと決心けっしんされたのです。

村上先生むらかみせんせいは常々つねづね、次のように言いわれていたそうです。「私は罪障ざいしょうの多い者ものだ。しかし、今いまは何不自由なにふじゆうなく法ほうの道みちを説といて喜んで暮くらせるのである。元来がんらい私は胃腸いちょうの弱い者ものであったが、長生きながいきできたのは皆妙法みなみょうほうの賜たまものである。昔むかしから罪障ざいしょうの消滅しょうめつということも色々聞きかされたが、現在げんざいの私の境遇きやうぐうを思おもう時ときに、人ひとの悩みなやみをお救すくいすることこそ自分の罪障ざいしょうを消滅しょうめつすることであり、妙法みょうほうこそ罪障ざいしょう消滅しょうめつの真実しんじつの方法ほうほうであると確信かくしんしている」

村上先生むらかみせんせいはご法話ほうわの中で、ご自分じぶんの欠点けってんを三つ挙あげておられます。

「一つは腹はらを立てること。後の二つは取り越こし苦労くろうと、堅苦しいこと。このため私の半生はんせいの幸福こうふくは蹂躪じゆうりんされたの



であります。この悪魔は私ばかりでなく、世の中の多くの人々をも苦しめているのであります。その中でも腹を立てることの損の大きいなるは、実に筆舌に尽し難いのであります。病の原因となり、災難のもとともなり、物質の損失を招き、ついには一命をも失う、恐るべき事態を招くことになるのであります」

村上先生は怒りの恐ろしさを悟り、腹を立てない堪忍の修養を生涯続けられたのです。

水風呂に入られた話は有名です。当番の人が風呂を沸かすのを忘れ、村上先生が水風呂に入るはめになった時、村上先生は何くわぬ顔で風呂から出て「今日は地獄に行く罪が一つとれたよ」と言われたそうです。

こんな話もあります。昔は自転車にリヤカーをつないで、そこにござを敷き、その上に座布団を敷いて乗り、村上先生は法座に赴かれたそうです。ある時、寺男の力ネさんが自転車をこいで村上先生を法座先にお連れしま



した。カネさんは後ろに村上先生が乗っておられるのを忘れて、急ハンドルを切ってしまいました。そのためリヤカーがひっくり返って、田んぼに村上先生が頭から落ちてしまわれたのです。その時、村上先生はカネさんに合掌して「カネさんありがとう、地獄に行く罪がこれで一つとれたよ」と言われたということです。

村上先生の時代は毎晩法座があり、村上先生が一人でご法話をされていました。参加者はそれほど変わりません。日達上人に私がそのことを「すごいですね。毎晩ですか」と言うと、「確かにすごい。もっとすごいのが毎晩同じ話だったことだ」と言われていました。毎晩、堪忍の話をされていたのです。日達上人が続けて言われたのが「堪忍の話を毎晩聞いても、なかなか実行はできないものだ」ということです。私達は常々、「ならぬ堪忍、するが堪忍」と聞いていますが、本当にいくら聞い



てもなかなか実行はできないものです。

山本妙順法尼のお母さまである服部妙晃法尼は村上先生むらかみせんせいの時代じだいに入信にゅうしんされました。やはり村上先生むらかみせんせいにいつも「堪忍かんにんしてください」と言いわれていました。子どもさんのことを相談そうだんしても、ご主人しゅじんのことを相談そうだんしても、何を相談そうだんしても「堪忍かんにんしてください」だったそうです。

服部法尼は腎臓じんぞうが悪く、一日中横よこになっなっていることもよくあったそうです。ただそんな状態じょうたいでも、堪忍かんにんをしていいると、次に何か徳とくを積つまなければと思おもわれたそうです。堪忍かんにんをして徳とくを積つむうちに腎臓じんぞうが良よくなり、生涯病院しょうがいびょういんに行いくことがなかったと言いわれていました。病氣びょうきというののは自分じぶんが作るもののです。怒おこることによって作ることも多おほいと思おもいます。堪忍かんにんを守るまもることによって病氣びょうきのもとが断たたれていくのだと思おもいます。



村上先生は、「杉山先生がご遷化された時に一番堪忍を試された」と言われています。

杉山先生がご遷化された直後、杉山家の代表という人がやってきて「現在の救済会の全資産を杉山家で相続するから、村上先生以下信者さんも全員出ていくように」と言いました。その時、村上先生は「これは諸天のお試しだ。諸天が私を試しておられるのだ。これを使い越えて一つ上の悟りに行かなければ」と思われました。

その時、信者さんの中で法律に詳しい方が、「裁判をすればおそらく勝てますよ。土地、建物は杉山先生の個人名義ですが、実質的に救済会の資産であり、杉山先生個人の物ではありませんから」と言われたそうです。しかし村上先生は「裁判はケンカをするのと同じです。長年守ってきた堪忍を破ることになり、徳を失うことになります」と断られたのです。そして、一年くらいかけて交渉され、杉山家の代表の方に財団法人の理事となって



いただくことを条件に話し合いがつき、救済会の財産は保全されました。村上先生の堪忍の徳が相手を教化したのです。また、堪忍の徳の力でしよう。信者さんの数が財団法人設立時には、杉山先生がご遷化された時の十倍になっていたそうです。

最近(さいきん)は日本(にほん)でも裁判(さいばん)が多いようです。裁判(さいばん)で白黒(しろくろ)はつきませんが、人間関係(にんげんかんけい)に大きな禍根(かこん)を残(のこ)します。できることなら話し合(あ)いで解決(かいけつ)したいものです。

村上先生(むらかみせんせい)のご教化(きょうけ)にこんな話(はなし)があります。

ある日(ひ)、信者(しんじや)さんがやってきて「今まで妙法(みょうほう)の信仰(しんこう)をしてきたけれども、格別(かくべつ)善(よ)いこともないからしばらく休(やす)ませてもらいます」と言(い)いました。それに対(たい)して村上先生(むらかみせんせい)は「あなたは今まで信仰(しんこう)をしてきたと言うけれども、あなたは本当(ほんとう)の信仰(しんこう)をしていなかったのです。だから善(よ)いことがなかったのです。真(ま)の信仰(しんこう)をしていれば必ず成(なり)



果があつたはずです。それがなかつたということは、わかりやすく言えば、あなたの実行が足りなかつたのです。ですから、信仰をしてきたけれども功德がなかつた、なんてことを絶対に人に言つてはいけません。言えば大謗法罪になりますよ」と釘をさされたそうです。

村上先生はご自身の体験から、慈悲・至誠・堪忍を実行してお題目を唱えていけば、必ず大きな功德があるのは間違いない。功德がないというのは真の信仰をしていなかったのだと確信されていたのです。

村上先生は六波羅蜜に照らし合わせて、ご自分の行動を毎日反省しておられました。「布施」に関しては、今日は貪る心がなかつたか、施しはできたか。「持戒」は至誠ですから、私利私欲に基づいて行動することがなかつたか。「忍辱」は堪忍ですから、怒ることはなかつたか、愚痴不足はなかつたか。「精進」、怠ける心はな



かったか。「ぜんじょう禅定」、心がしん穏やかであったか、ぜんどう善道をは
ずれて迷う心はなかったか。「ぶっち仏智」、ほとけ仏さまの智慧を
もって物事が判断できたか、偏った心なく人に平等に接
することができたか。このように村上先生は日々反省し
欠点を正しておられたのです。

わたくしたち私達も村上先生にならって、夜寝る前に今日一日どう
であったかを反省して、日記などをつけてみるとよいと
おもいます。

